

# ドリンク等の原料茶生産向け品種の選定

## [研究のねらいと取り組み]

- ・ドリンク等の原料茶生産においては、安定した品質の荒茶を毎年多収で生産できる早晩生品種を幅広く導入することが望ましい。
- ・このため、本調査では、早生から晩生まで6品種を晩期に摘採した時の収量・品質の違いを明らかにし、多収栽培に適した品種を選定する。

## [研究の成果]

- ・県奨励品種6品種を対象にドリンク原料茶としての収量性及び品質を評価した。
- ・一番茶を適期(煎茶としての適期、4.5葉期を目安)から5~7日遅く、二番茶は生育期間を適期より5~7日遅く摘採し、生葉収量と荒茶品質を調査した。秋冬番茶は秋整枝の適期に摘採し、生葉収量のみ調査した。
- ・「やぶきた」の年間収量は3か年ともに約2000kg/10aであった。一方、「つゆひかり」は3か年ともに3500kg/10aを上回り、「さやまかおり、かなやみどり、さわみずか」は2600kg/10aを上回った(図1)。
- ・一番茶の品質は、官能審査では品種間に顕著な差は見られなかった(図2)。二番茶では、3か年間を通して「さやまかおり」で評価が劣り、硬葉臭や硬葉味などが目立ち、「やぶきた」も評価がやや低い傾向であった(図3)。
- ・収量性、荒茶品質を総合的に評価すると、早生では「つゆひかり」、晩生では「さわみずか」が多収栽培に適性があると考えられた。

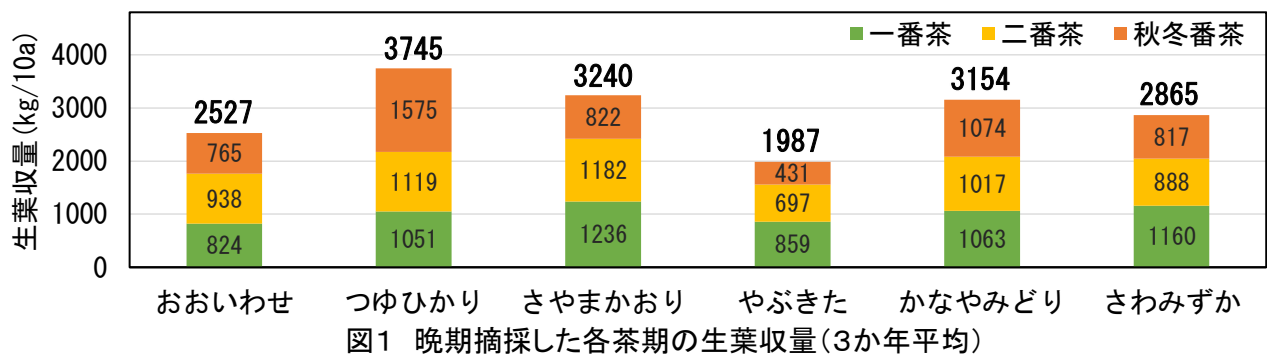


図1 晩期摘採した各茶期の生葉収量(3か年平均)

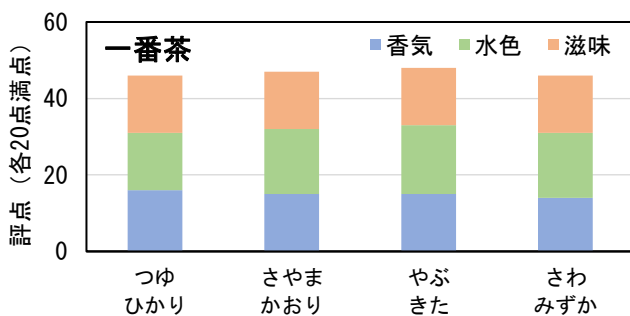


図2 晩期摘採した一番茶の荒茶官能審査結果(3か年平均)

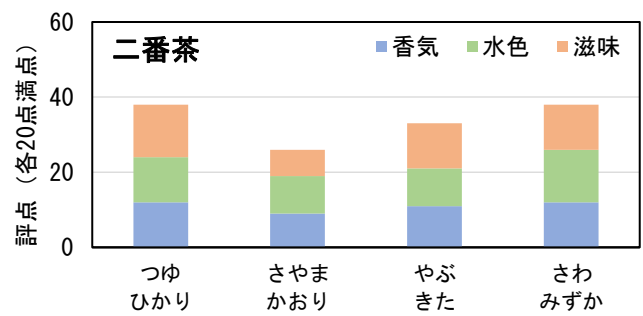


図3 晩期摘採した二番茶の荒茶官能審査結果(3か年平均)